中高生とともに差別と闘う

『写真に写るカレン』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

写真に写るカレン

新型コロナウィルスのさなか、人出の薄らいだ駅前の百貨店に久しぶりに出向きました。我が子が小さかった頃ならまだしも、こんな機会でもなければ来ることもなくなってしまった懐かしい思い出の場所。

地下の食料品売り場をぶらついていると、懐かしい地元のうどん店を見つけました。

「こんなとこにあったっけ？」

そう思い近づくと、額に入れて飾られた、芸能人が訪れたらしき写真が一枚、目にとまりました。

「誰だろう…」

興味本位で見つめる先に目に入ってきたのは、一緒に記念写真に収まっている店員の顔でした。

「…カレン」

店の店員として働いていた子は、教え子のカレンでした。

「なんで…結婚差別はあるんだろうなって、いつも思う…。なんで部落の人は結婚、好きな人とできないのかなとか。お互い好きだったらそれでいいじゃないって。

結婚差別…あんまり他人事じゃないよ。全然身近にあるよ。部落ってだけで、人が死ぬよ…。絶対他人事って思わないでほしい」

彼女の言葉がよみがえってきます。涙を堪えながら必死に訴えかけるカレンの声。そのときの記憶。私の再出発の原点とも言うべき、子どもたちとの出会いの記録。少し長いお話になりますが、おつき合いください。

ひよっこの再出発

その学校は、私が大学を出てすぐに赴任した学校でした。右も左も分からない若造が三年間を過ごした後、十二年ぶりに戻ってくることになりました。まだまだひよっこで、まともな教育などできていなかった新任三年間の埋め合わせをせよ、とどこからか声が聞こえてくるようでした。

なおかつ私としては、十二年間で培った同和教育を、どこまで自力でやりきれるかが試されていると、自分自身に言い聞かせる再出発の年でした。

一学年五十三人の新一年生を受け持つ中学校生活がスタートしました。私は一年時から思うままに人権学習に取り組んでいきました。

頃合いを見計らい、二クラス合同の人権学習もはじめました。

人権を語り合う中学生交流集会にも意欲的に参加していきました。

文化祭では人権劇にも取り組み、長崎への修学旅行では、「高校生一万人署名」のメンバーとの交流も実現させました。

そんな活動を通して、語り合うことの大切さ、とりわけ「本音で語り合う」ことの大切さを、ずっと子どもたちに問い続けてきました。

中身の濃い人権学習を終え、来月にはいよいよ最終学年になろうかという中学二年生の三月。子どもたち全員に個別面談を実施しました。それは、進路についての面談というよりも、ラスト一年をどう過ごすのか、本当の仲間となっていくため、本音で語り合える関係を築くために、自分にできることは何なのか、を問いかけるものでした。

二学年との決別と三学年への決意

月が明け、三年生に進級した四月下旬。二クラス合同の人権学習。タイトルは、「二学年との決別と三学年への決意」。最後の一年を迎え、これまでの二年間をふり返り、これからこの学年をどんな関係にしていきたいのかを語り合う時間です。自分の中にある本音とは何か、仲間に本当に伝えたい思いとは何かを探り探りしていたとき、マリアが手を挙げました。

マリアは大柄で豪快で、いつも元気いっぱいの明るい、同和対象地区学習会に通う女の子でした。そんなマリアが、意を決して語りはじめました。

「今日はきちんと本音で語らないといけないと思って…。

私のお母さんは一緒に住んだことなんて三ヶ月しかなくて覚えてないんだけど…。どっちの両親とも三ヶ月しか住んだことなくて、全然覚えてないし、自分の親ともあんまり思ってなくて…。

先生には、『ホントは親と住みたいんじゃないか』とか言われたけど、住みたくなんかないし。

この前、春に久しぶりに会って、あんまり変わってなくて…。全然覚えてなかったけど…」

この時点でマリアは涙声で、周りからは、「頑張れー！」と声がかかっていました。

「でも二年生になってから、母ちゃん（母親代わりの祖母）に、『これから会うこともあると思うし、私が死んだらちゃんと親のところに行くのよ』って言われて。だから三年生になってちゃんと勉強しなくちゃと思ったし。二年生や一年生の時とかは遊んで怠けてばかりだったけど、今になって後悔しても仕方なくて…。やっぱりそんなところが私のダメなところなんだと思って、いつも後悔して…。いつも悲しくなったら泣いたりして…。

ちゃんと高校に入れたらっていうか、高校にちゃんと入って、家の人に心配かけないようにしたい。自分はバカだから、遠くの学校に行ったらJRに間に合わないとか母ちゃんに言われて。でも自分の行きたい学校が、ないって言ったら嘘になるから、頑張りたいです」

少し小さくなったように見える背中を震わせながら、必死になって、胸底にため込んでいた思いを吐き出しました。マリアに続いて、この後も父親を亡くした子、祖父を亡くした子が、次々と家族の話をはじめました。

イラスト　中島　亜唯